

玉名高校校庭遺跡

玉名高等学校渡り廊下改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2014.3

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、平成 25 年 8 月に、玉名高等学校渡り廊下改築工事に伴う埋蔵文化財確認調査の一環として、熊本県玉名市大字中に所在する「玉名高校校庭遺跡」の発掘調査を実施しました。

調査の結果、古代～中世（13 世紀代と推定）の溝（あるいは道路）1 条と柱穴 1 基の遺構が確認されました。出土遺物は、古代から中世の遺物が中心でしたが、縄文時代前期の土器も確認されました。遺跡地図の中で、「玉名高校校庭遺跡」は弥生時代と古墳時代の包蔵地とされていますが、玉名郡衙へ続く古代官道（8 世紀～9 世紀）が南北に通っていることが平成 4 年度の発掘調査により判明しています。今回確認された溝（あるいは道路）は、古代の郡街道に沿う様に南北に走っておりその関連性が考えられます。

今回の報告書が学術的な蓄積に限らず、文化財保護に対する关心と理解に寄与できれば幸いです。

最後に、文化財保護の趣旨を理解し、発掘調査や報告書作成に関してご協力いただいた熊本県教育庁教育総務局施設課、玉名高等学校、植野建設株式会社、株式会社一級建築士事務所の関係者の方々にお礼を申し上げます。

平成 26 年 3 月 20 日

熊本県教育長 田崎 龍一

例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市中に所在する玉名高校校庭遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は、玉名高等学校渡り廊下改築工事に伴う埋蔵文化財確認調査の一環として、熊本県教育庁教育総務局文化課が平成 25 年度に実施したものである。
- 3 発掘調査における記録作業は、次の者で行った。
(1) 実測・測量：岡本真也、大坂亜矢子 (2) 写真撮影：岡本
- 4 整理報告書作成業務は、次の者で行った。
(1) 実測・製図・校正：佐藤淳子、江見恵留、宮崎典子、松本裕子、府内博子
(2) 写真撮影：村田百合子、松本智子、蓮池千恵
- 5 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室に保管している。
- 6 本書の編集は、岡本が行い、佐藤、江見、松本がこれを補佐した。
- 7 調査体制は、以下のとおりである。
調査主体：熊本県教育委員会
調査責任者：小田信也（文化課長）・西住欣一郎（課長補佐）
調査事務局：馬場一也（課長補佐）・廣石啓哉（主幹）・天草英子（主任主事）
調査担当：岡本真也（主幹兼調査第 2 係長）・坂田和弘（参考）・大坂亜矢子（嘱託）
整理担当：岡本・佐藤淳子（嘱託）・江見恵留（嘱託）
【発掘作業員】 村田文武、北原靖治、本田秋信 【調査指導】 亀田 学、池田朋生

凡 例

- 1 調査区は、遺構が確認された場所のみ平面図、断面図で表示しており、その他の場所はトレンド断面図のみで表示した。
- 2 標高レベルは、植野建設から得た情報を基に算出した。
- 3 現地での遺構図の実測は、20 分の 1 線尺で行った。
- 4 遺物の実測は、原寸大でを行い、報告書に掲載した実測図の縮尺は 3 分の 1 とした。

第1章 調査の経緯と経過

1 調査の経緯

平成25年7月に熊本県教育厅教育総務局施設課から玉名高等学校渡り廊下改築工事に伴う埋蔵文化財の照会があり、協議を行った。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「玉名高校校庭遺跡」であるため、工事箇所の確認調査を行うこととした。その後平成25年8月13日付け教施第251号で予備調査依頼があり、学習に影響を与えない夏休み中に旧渡り廊下の基礎を抜く作業を行わなければならない工事工程を鑑みて、確認調査の一環で工事立会と発掘調査を実施することとした。

2 調査の経過

発掘調査は、平成25年8月21日～23日に行い、その後、熊本県文化財資料室にて整理作業と報告書作成を行い、平成26年3月に本書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置

本遺跡は、菊池川の右岸、小岱山から南側に続くなだらかな丘陵上に位置し、標高約16mを測る。丘陵の基盤は表層地質図(熊本県1996)によれば、洪積統(更新統)と表現されており、洪積世の堆積物であることがわかる。周辺の地質から推測すると、小岱山を構成する先第三紀花崗岩及び閃綠岩の上に阿蘇熔結火山碎屑岩が堆積した基盤層であることが考えられる。

2 周辺の遺跡

第1図を中心に本遺跡に閑連する周辺遺跡について概観する。南東約1kmの標高6～7mの微高地には縄文時代中期の尾崎貝塚(468)がある。境川を挟んだ丘陵地帯には弥生時代から古代・中世の遺跡が点在する。

古代は、現在のJR玉名駅周辺にあったとされる大湊から玉名郡家跡(263)まで続く官道跡(269)が本遺跡内を南北に貫いている。中世は、山田日吉神社を中心とした「白山十二坊」と呼ばれる12ヶ所の修驗道場跡と各坊(225, 227, 228, 230, 231, 233, 235, 236, 238, 242, 243, 244)で崇拝されてきた石造物が残存している。山田山吉祥寺跡(234)や中尾西原遺跡(274:ホカンヤカタ)等の居館の可能性がある地名や地形も残る。高岡城跡(254)は大野一族が城主とされるが、伝承では天徳二年(958)紀清隆の長男の居館と伝えられる。



第1図 玉名高校校庭遺跡周辺遺跡地図 (S=1/12000)

2 遺構

3層を埋土とする遺構が2基検出された。(第3図参照)

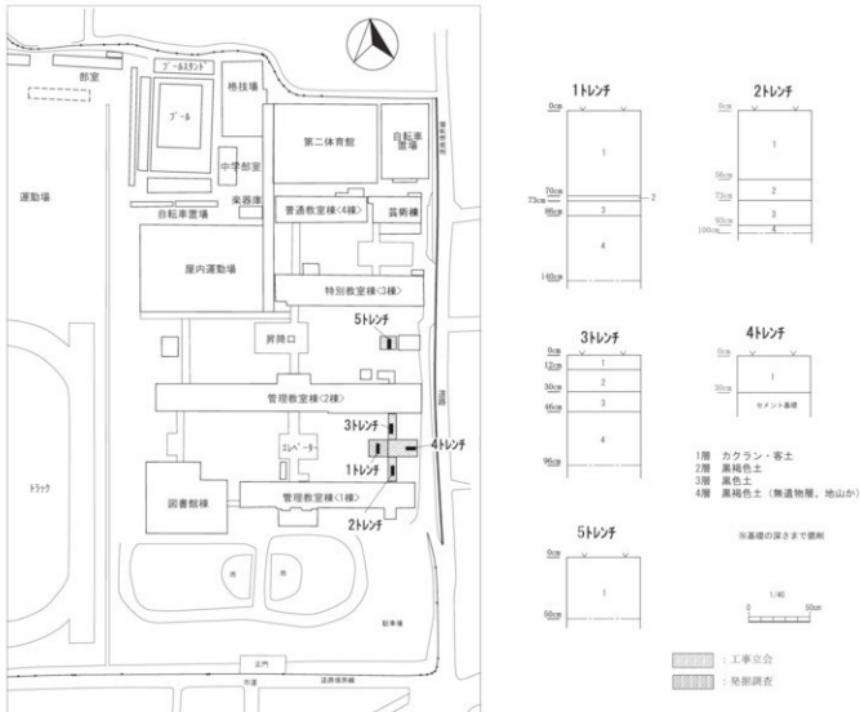
(1) 溝（あるいは道路）

南北（北北東に12～13度ずれる）につながる溝を1条検出した。確認した長さは7.2mで幅0.85～0.9m、深さ0.2mであった。北側の一部に硬化面が残存することから道であった可能性も考えられるが全面には広がらない。区画の溝あるいは道路であろう。

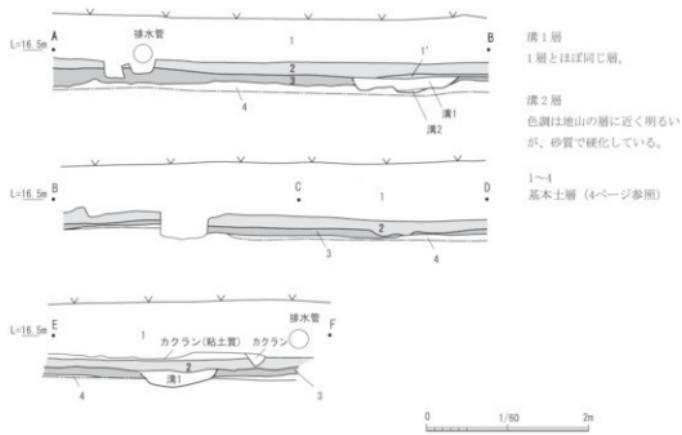
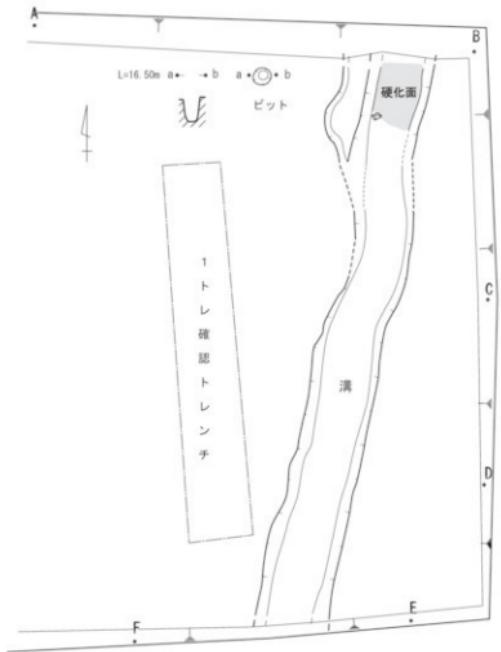
この遺構から出土した遺物は古代の須恵器や土師器の小片が数点であったが、図化できるものはなかった。埋土は3層であることから考えると時期は古代～中世（13世紀代）と考えられる。

(2) ピット

径0.2m、深さ0.27mのピットを1基検出した。径は小さいがしっかりととした掘方であることから、柱の穴と考えられる。しかし、現状での柱穴のつながりは確認できなかった。須恵器片が1点出土したが、小片のため図化できなかった。遺構の時期は溝と同じ古代～中世と考えられる。



第2図 玉名高校高庭確認調査トレンチ箇所及び土層断面図



第3図 1トレンチ拡張調査区遺構配置図及び土層断面図

3 遺物

No.1は、縄文時代前期、轟式土器の深鉢の口縁部から胴部上半部にかけての資料である。残存高15.9cm、器厚0.9~1.3cmを測る。焼成は良好であり、胎土は角閃石、石英、長石、雲母などを含んでいる。色調^(注1)は内外面とも明赤褐色(Hue5YR5/6)である。器面の調整は内外面ともに口縁部周辺は横方向、胴部は縱方向の貝殻条痕文であるが、内面の胴部は残存している条痕が薄い。器形はやや波状口縁で尖底の深鉢形と考えられる。柴畠編年では轟A式の2段階にあたり、鎌石橋式^(注2)の範疇で捉えることが可能である。1トレンチと2トレンチの間の3層から出土している。

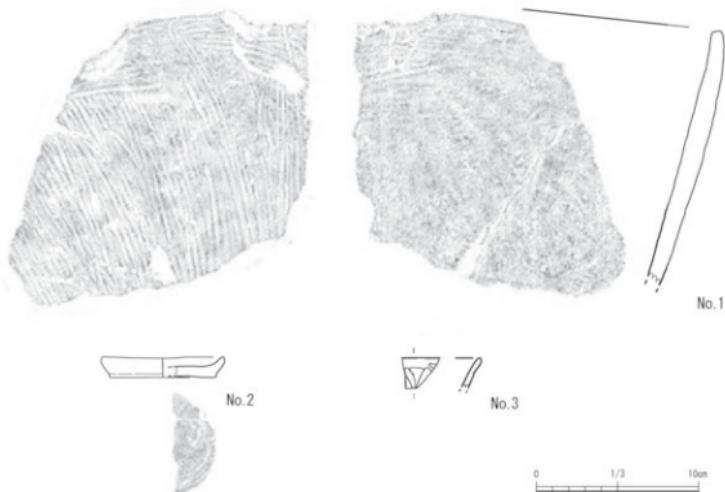
No.2は、土師器の小皿である。復元口径は7.4cm、高さ1.25cmを測る。焼成は良好であり、胎土は石英、長石、雲母、赤色粒を含んでいる。色調は内外面とも橙色(Hue7.5YR7/6)であり、器面の調整は内面は縱、横方向のナデ、底面は糸引き離しの痕跡が見られる。美濃口編年を参考にすれば、口径が7cm代であることから13世紀代で捉えることが可能かもしれない。しかし、杯とのセットではないので断言はできない。2トレンチ周辺の3層から出土している。

No.3は、龍泉窯系青磁椀の口縁部である。残存高1.85cm、器厚0.3cmを測る。外面はヘラで連弁文を刻んである。山本編年では梶II類でE期(13世紀前後~前半)の所産である。2トレンチ周辺の3層から出土している。

この他に3層からは、古代の須恵器や土師器片が出土しているが、小片であるため、時期の特定までには至っていない。また、中世の滑石製石鍋片も出土している。

注1) 色調は、新版標準土色帖 2004年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修による。

注2) 池田朋生氏のご教示による。



第4図 玉名高校校庭遺跡出土遺物実測図

第4章　まとめ

今回確認された溝（あるいは道路）の時期が考えられる古代から中世（13世紀代）について、周辺遺跡の調査例や先行研究等を引用して私見を述べてみたい。

【古代】 玉名郡衙のうち玉名郡倉と立願寺庵寺は、昭和29年（1954年）と31年（1956年）に、田辺哲夫団長により発掘調査が実施されその位置が比定されてきた。庁院の発掘は平成2年（1991年）に行われ、正殿である桁行八間（九十二尺）梁行三間（三十二尺）の総柱の掘立柱建物（主軸は西に三度傾斜）が確認されている。平成3年（1992年）に行われた大湊遺跡と郡街道の発掘調査では、8世紀代の水駅であったことや切り通しの道路が大湊から郡家まで1.6kmに亘って敷設されていることが判明した。また、大湊から郡街道と郡家を結ぶ延長戦上に金比羅山（標高147m）^{注3)}が存在することから意図的な配置がされていたことも指摘されている。

これらの調査成果から7世紀末～8世紀初め、寺院の伽藍の整備、郡街道の敷設、大湊（水駅）^{注4)}の設置、郡家（庁院・館院）の設置など、玉名郡衙の造営が一齊に開始されたと考えられている（坂田1994）。

今回確認された溝（あるいは道路）が古代と仮定すれば、軸線が北北東に12～13度ずれることから、8世紀前半から中頃の遺物が出土してほぼ南北に走る郡街道より時代が下る区画溝あるいは道路の可能性を考えられる。

【中世】 古代末から中世にかけて日置氏の相伝私領を基にした宇佐八幡領伊倉庄（伊倉別符・伊倉保）、菖崎宮領大野別符^{注5)}、太宰府安楽寺領玉名庄、仁和寺領玉名庄などが成立した。大野別符は菊池川右岸の高瀬から岱明町一带にかけて広がっており、特にこの遺跡が含まれる。この地を支配した大野氏（紀氏）は建久四年（1193年）大野二五〇町の地頭として閑東から下向、嫡子時隆が高瀬・中村を領し中村姓とし、次男国秀は築地を領し築地姓とし、三男秀隆は居屋敷などを領し大野を姓としたとされる。

築地には浄光寺があり、築地氏の館跡と伝えられる土塀や堀をめぐらした星敷跡が残っている。その北方約1200mには吉祥寺址があり、「建長二年大才庚戌五月十六日」銘の宝塔の残欠が1基、吉祥寺址毘沙門堂には「建長二年壬子七月廿八日」銘の宝塔の残欠が1基残存している。いずれも西暦1250年であり、13世紀中ごろの宝塔である。また、この一帯は修驗道との関連性が高い「白山十二坊」が現存しており、吉祥寺址との結びつきが想定される。

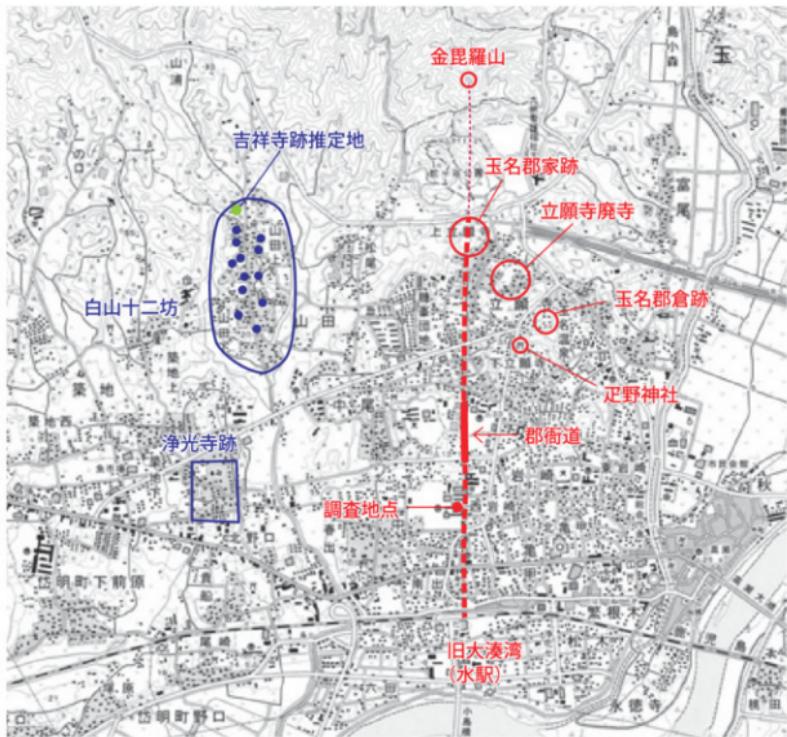
今回確認された溝（あるいは道路）が同じ基本土層の3層から出土している遺物（第4図:No.2と3）をもとに、中世（13世紀）と仮定すれば、大野氏（紀氏）のエリア内に存在したことは間違いない、浄光寺や吉祥寺址との関連性も考えられる。また、庁院から13～14世紀の遺物が出土していることや郡街道の埋土4層から中世後期の遺物が出土していることから、周辺は中世段階でも古代以降何らかの土地利用がなされていたものと考えられる。

ここでは、溝（あるいは道路）の軸線が、南北に走る古代の郡街道と比較して、北北東に12～13度ずれることから、遺構の時期を古代の終わりから中世（13世紀代）と想定し、古代の影響を受けて、中世まで続いた区画溝あるいは道路の名残として捉えておきたい。

注3) 金比羅山（標高147m）は三角形に尖った山で山頂に大きな立石群があり、磐座になっている。磐座は都司の日置氏が祭る氏神の厄石神と考えられ、磐座を基点に玉名郡衙が設計されている（坂田1994）。

注4) 郡街道の南端に「大湊」という小字名が存在する。

注5) 別符とは、「別納の免符」に由来する。莊園や郡・郷等の公領で、本来の支配収取の単位とは別に、国衙が開発等により新たに特権を認めて、所當や公事（年貢や雜税）の一剖を免ずる国姓を与えることを意味する（工藤2005）。



第5図 遺跡周辺の古代・中世の主要遺跡位置図 (S=1/25,000)

【参考・引用文献】

- 多田隈豈秋 1975 「九州の石塔」上巻 (福岡・佐賀・長崎・熊本) 西日本文化協会
- 松本雅明編 1985 『玉名市』「熊本県の地名」日本歴史地名体系第44巻 平凡社
- 徳丸亞木 1993 『座と祭り（オホシ）』「玉名市史」資料篇3自然民俗 玉名市
- 坂田邦洋 1994 「玉名郡衙」玉名市歴史資料集成第12集 玉名市秘書企画課
- 美濃口雅朗 1994 『熊本県における中世前期の土師器について』「中近世土器の基礎研究X」回転台土師器の諸様相
日本中世土器研究会
- 熊本県 1996 「表層地質」『熊本県環境基本計画 環境特性図（地図集）』
- 山本信夫 2000 「大宰府条坊跡 XV」－陶磁器分類編－太宰府市教育委員会
- 工藤敬一 2005 『鎌倉幕府体制下の玉名』「玉名市史」通史篇上巻 玉名市
- 栗畠光博 2008 『轟式土器』「総覧・讃文土器」株式会社アム・プロモーション
- 玉名市教育委員会 2011 「玉名市遺跡地図」玉名市文化財調査報告第26集
- 橋口剛士 2013 「辺田見中道遺跡2」－上益城農業協同組合ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－
御船町文化財調査報告第3集 御船町教育委員会



写真1 玉名高校 正門(南より)



写真2 玉名高校(国登録文化財の校舎)



写真3 調査区全景1(南東より)



写真4 調査区全景2(北東より)



写真5 1トレンチ拡張区の重機掘削状況



写真6 1トレンチ土層断面(西より)



写真7 2トレンチ全景(南より)



写真8 3トレンチ土層断面(東より)



写真9 4 トレンチ状況(北より)



写真10 5 トレンチ土層断面(東より)



写真11 1 トレンチ拡張区造構検出状況:白線なし(南より)



写真12 1 トレンチ拡張区造構検出状況:白線あり(南より)



写真13 溝(あるいは道路)北側土層断面



写真14 溝(あるいは道路)南側土層断面



写真15 溝(あるいは道路)硬化面の状況(南より)



写真16 溝(あるいは道路)硬化面の土層断面(南より)



写真17 1トレンチ拡張区造構完掘状況(校舎屋上南より)



写真18 調査区全景(校舎屋上南より)



写真19 ピット検出状況



写真20 ピット完掘状況



写真21 調査区と現在の郡街道(校舎屋上南より)



写真22 調査区(左上)と現在の郡街道(南より)



写真23 現在の郡街道(校舎屋上北より)



写真24 繩文時代前期眞式土器(No.1)出土状況(3層中)



写真25 溝(あるいは道路)出土遺物



写真26 3層出土遺物



写真27 縄文時代前期鼎式土器(No. 1)



写真28 滑石製石鍋片(2層出土:写真のみ掲載)



写真29 龍泉窯系青磁(No. 3)と糸切り底土師器小皿(No. 2)

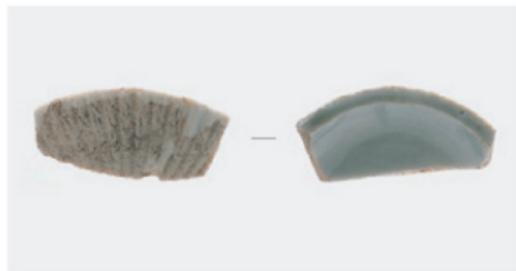


写真30 古伊万里の紅皿片(1層出土:写真のみ掲載)



写真31 土錘片(3層出土:写真のみ掲載)

報告書抄録

ふりがな	たまなこうこうこうでいいせき							
書名	玉名高校校庭遺跡							
副書名	玉名高等学校渡り廊下改築工事に伴う発掘調査							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第306集							
編著者名	岡本真也							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県中央区水前寺6丁目18番1号 Tel 096-383-1111（代表）							
発行年月日	2014年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
玉名高校校庭遺跡	熊本県 玉名市 中徳丸	(206)	437	32° 55' 39"	130° 33' 5"	2013.8.21 ~ 2013.8.23	362.96 m ² (工事立会 も含む)	玉名高等 学校渡り 廊下改築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
玉名高校校庭遺跡	包含層	縄文 古代 中世	溝(あるいは道路) 1条 ビット 1基	縄文時代前期縄式土器 龍泉窯系青磁(13世紀前半) 糸切り底土師器小皿				
要約	今回の発掘では、古代の大湊(水駅)と推定される低地から玉名郡家へとつながる、南北に走る郡街道に沿う形(北北東に12~13度程度のずれ)で、溝あるいは道路(幅0.85~0.9m、深さ0.2m、確認長7.2m)を1条確認した。時期は古代~中世(13世紀)と推定される。							

熊本県文化財調査報告 第306集

玉名高校校庭遺跡

玉名高等学校渡り廊下改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行年月日 平成26年3月20日

発行 熊本県教育委員会
〒862-0950 熊本市中央区6丁目18番1号

印刷 有限会社ソーゴーグラフィックス
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1426-1

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第306集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：玉名高校校庭遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日